

よみがえった大黒天像

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

か代々宇都宮城主の信仰を得たこの話は、信ぴょう性に乏しいが、大黒町の人々にとって三面大黒天は、町の象徴として、また、福德などをもたらしてくれる神様として厚く信仰されてきたことは確かである。

ところが、大黒天像を祀る祠が旧日光街道の拡幅工事に引掛かった。旧大黒町の住民で組織する大黒町自治会では、大黒天像が無くなるのは一大事として、破損した木造の大黒天像に代わり石造の三面大黒天像を今まであった神明宮境内に造立したのである。大黒町の名は無くなったが、平成の最後を飾る平成三十一年一月、三面六臂の大黒天像が蘇った。ここに大黒町があつたことの証である。

都市整備などで歴史的文化的財が損なわれることの多い昨今、大黒町自治会のこうした動きは、歴史を取り込んだ町作りとして大いに注目すべきものである。

り、蓬萊町は、不老不死の薬がある蓬萊山にちなんだ蓬萊観音を祀ったことによるといふ。大黒町の名は、町内に大黒天像を祀ったお堂があつたことによるものといふ。

ところで大黒町の由来となつた大黒天像の正式な名称は、「三面六臂大黒天」、つまり三つの顔と六本の腕を持つという大黒天である。そもそも大黒天は、元来インドのヒンドウー教の神様とされ、日本においては、最澄が毘沙門天・弁財天と合体した三面大黒天を比叡山延暦寺の台所の守護神として祀つたのが始まりといふ。

では大黒町で、何故三面六臂大黒天を祀つたのであろうか。地元で伝わる『大黒町三面大黒天ノ由緒』には、大筋次のように記されている。「大黒町にある大黒天は、今から約七百年前、宇都宮城主の宇都宮公綱が、鎌倉より比叡山の別当を迎えて三面大黒天を刻んだもので、本尊として神福寺に大黒天堂を建立して祀つたも

のであり、明治維新まで代々宇都宮城主の信仰を受けていた。ところが戊辰戦争で寺堂が焼失したが、三面大黒天は、神福寺(明治期に廃寺となつた)の別当の気転により土中に埋められ焼失を免れた。その後栃木県技師(実際には栃木県女子師範学校訓導)の森本権作先生に、大黒天の鑑定を依頼したところ鎌倉時代の作とのお墨付を得た。なお、明治二年に神福寺の大銀杏を伐採する際に、大銀杏の樹齢の古さを知ることができ、改めて神福寺の起源の古さが確認できた。神福寺の古号は、三面大黒天に起因するものであり、大黒町の名は、三面大黒天によるものである。なお、神福寺旧跡は、大黒

町の南端にて国道(日光街道)の東側。神明宮社地内にあつたとある。

この由来書は明治末期ごろに書かれたものと思われる。宇都宮公綱が刻んだと



旧日光街道に面して建つ神明宮



蘇った三面六臂大黒天像